
杏の思い出

神井 麻理愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杏の思い出

【Nコード】

N6418X

【作者名】

神井 麻理愛

【あらすじ】

声楽科の待生、彼方かなたと、彼女の同級生で敬虔なクリスチャンの美笛みできは姉妹のような関係。

彼方は美笛を可愛く思っており、美笛は彼方に憧れている。しかし、ささいなきっかけでお互いにリビドーを感じていることを確信してしまう。そして二人の想いはすれ違い、自らの想いと葛藤し、もがき苦しむ。※「Bitter」とかなり関連あり

序章（前書き）

BL小説、「Bitter」を読んでからの閲覧をおすすめします。
「Bitter」の主人公和也の姉の過去話です。

序章

「じゃあ、今日はここまで。」

都市のとある音楽教室。

最近ここに入った若い女の講師が生徒の注目を集めているという。

「背高くて美人でかっこよくて、しかも大抵の楽器はこなせて、声楽もできちゃうなんて素敵…。」

「あの低いクールボイス、ドキドキしちゃう…。女にしとくのもったいないわ…。抱かれない…。」

女子生徒たちはうっとり彼女を見つめた。

視線の先では彼女がグランドピアノでショパンの「ノクターン」を奏でている。

鳶色のセミロングヘア。

吸い込まれそうなほどの大きな瞳。

キリッとした色黒の肌。

凛々しく尖った顎。

スレンダーな長身。

：

……そう、彼方である。

彼女はシンガーソングライターだが、最近売上が伸びないため、

近所の音楽教室で器楽、声楽を教え始めていた。

彼女には真っ白な教室に黒いグランドピアノというコントラストがよく似合うのだ。

勤務時間が終了し、彼方が下駄箱を開けると……。

（あちゃー。なんじゃこりや。）

そこには山ほどのラブレターが入っていた。

実は彼方は昔から男性より女性にモテる。

勿論このルックスもあるだろうが…

きつと男っぽくてサバサバした性格からだろう。

亡き父から厳格にしつけられ、

弟の親代わりも果たしているのだから、自然にそうなる。

しかし、いくらモテても恋愛をする気にはならない。

一度結婚を経験し、離婚したこともその理由の一つなのだが…。

家の玄関を開けると、弟の和也がクイックルワイパーで廊下掃除をしていた。

「ただいま。」

和也は彼方に応えることなく、姉のかばんの中をまじまじと見た。

「相変わらず、女『には』モテるな。」

和也はにやついていた。

「和也こそ、中学のとき、屈折ゲイに付き纏われたでしょ！」

彼方は投げつけるように言い返すと、

さっさと自室へ入った。

「はあ…。」

コツンとドアに頭をつけると

そのまま崩れるように座りこんだ。

実を言うと、一人になるとホッとする。

やっと仮面を取れるから。

(やっぱり、僕らは姉弟なんだね…)

「僕」というのは彼方にとって一番自然な一人称である。

理由はよくわからない。

20歳で見合い結婚させられてから、女言葉で話してはいる。

しかし、未だに自分じゃない誰かを演じているように思う。

彼方はゆっくり立ち上がると、窓を開けた。

庭先の杏の木がすぐ目に入る。

実がなるのは初夏であるから、もう葉が落ちはじめていた。

風に吹かれる葉の音が遠い日の思い出を語っているようだ。

杏の実は保存が効かない。

今年は仕事が忙しく、

保存が効くようにと全部ジャムにしてしまった。

近所に配ってもまだまだ余り、

とうとうカレーにも入れた。

「お前は一体何を考えているんだ」と和也に文句を言われたっけ。

そんな弟も最近大人びて、ほとんど反抗しなくなった。

先程のように姉の自分をからかうようにもなり、

冗談も飛ばすようになってきた。

何が彼を変えたかは言うまでもないこと。

結果的にはよかったものの、彼方には煮え切らない思いがあった。

（もう和也もそんな歳か、あんなに小さかった和也が…。）

勿論、弟の成長を喜んではいる。

しかし、和也の賢一への想いに気づいたときはショックだった。

「男を好きになるなんて信じらんない」とかそういうことではない。

和也があまりにも自分に似てきたからだ。

一番似て欲しくないところが。

（全く、半分しか血が繋がっていないというのに…。）

窓辺によりかかると

彼方はひとり、遠い記憶を蘇らせた。

続く…

1

時は彼方の高校時代に遡る。

当時、彼方はキリスト教系音楽大学の付属高校に通っていた。

彼女は声楽科の特待生で

5オクターブの音域を操る彼女に教員たちは期待していた。

無論、それを妬んで意地悪をしてくる輩もそれなりにいた。

しかし、彼方は和也のような高慢ちきではないので、

彼ほどひどいいじめには合わなかった。

ただ、当時はバリバリの僕少女。

さらに立ち振る舞いが男そのものだったことから

「痛い女」などと悪口を言う者たちもいた。

外見はボーイッシュというわけでもなく、普通の女子高生だったのだが…。

とにかく個性が強く、目立つ存在なだけに

周りの人間の「好き」、「嫌い」が分かれていた。

「彼方、もう高校生なんだから『僕』は辞めなよー。」

友人たちが彼方に注意する。

「『私』って言うのが気持ち悪いんだよ。」

彼方はうんざりしたように言った。

「本当に『男』ねー。それじゃ彼氏できないわよ。」

「いないね、そんなの。」

彼方はきっぱりと言いつつ放った。

17歳という年頃にも関わらず、男子には全く興味がなかった。

それは男子を追っかけるより、音楽をやっている方が楽しいということもある。

しかし、それだけとは言い難い。

：

彼方には放課後に必ず向かう場所があった。

杏の木に囲まれた白い教会。

大理石の門をくぐり抜けると

杏の木の下のベンチに一人の少女が座っていた。

真っ黒なおさげに

日本人形のような地味な顔立ち。

よく見なければわからないが、少しふっくらした体つき。
何の特徴もない質素な少女である。

「美^{みて}笛^き！」

彼方は彼女に向かって手を振った。

彼女も微笑みながら手を振り返した。

彼女は桜^{さくら}川^{がわ} 美^{みて}笛^きという。

同じ声楽科の3年生である。

彼方の親友…というよりは姉妹のような関係だ。

彼女は日中ハーフで、8歳のとき中国から渡ってきたらしい。

当時日本語が不慣れで、日本の生活になじめなかったからか、かなり引っ込み思案な性格になってしまったみたいだ。

わりとお節介なところがある彼方は、彼女を放っておけず、

あれこれ構っているうちに仲良くなった。

「夕礼拝って18…00からよね？カナちゃんソロ頑張ってたね。」

彼方と美笛は共に学校の聖歌隊員である。

今日はこの教会で夕礼拝のゲストとして歌うことになっている。

歌の上手い彼方はソロを任されることが多い。

しかし、音域が広いだけに、パートをあちこち回されたり、

「お手本」として、一人で歌わされたり、

未熟な隊員に腹を触らせるように講師から言われたりすることに閉口することもある。

「カナちゃんはすごいわ。私と同年なのに。」

美笛は嫉妬からではなく心からそう言った。

「同じ声楽科なのに、私なんて全然ダメ。未だにソロの一つも貰えないし。」

美笛は俯いてしまった。

ただ彼方を褒めるつもりがいつのまにか愚痴になってしまった。

「ソロを貰えればいいのか？僕は美笛の声がすごく好きだけど。」

彼方の凜とした物言いに美笛は顔を上げた。

彼方の表情は真剣だった。

「それに君は毎朝礼拝に参加してる。敬虔なクリスチャンじゃないか。」

美笛は彼方と違って正式に受洗したクリスチャンだ。

「音楽で一番大事なことは上手いかどうかじゃないと思う。先生だって言ってたじゃないか、歌は喉で歌うものじゃなくて『心』で歌うものだって。」

「カナちゃん……。」

美笛は泣きそうな顔で彼方を見上げた。

彼方の優しさが嬉しいのだろうか。

彼方はそんな美笛の手をとって微笑みかけた。

「もうよそう、こんな話、行こうよ。」

「うん。」

彼方は美笛を可愛いと思っているし、

美笛は彼方に憧れている。

親友とは少し違った関係なのかもしれない。

二人は手を取り合うと、一緒に教会の聖堂に入っていった。

ここは二人のお気に入り場所なのだ。

続く……

2

「眠れぬ夜半には

み国をおもいて

暗きのちからに

打ち勝たせたまえ」

広い聖堂に彼方のフルートのような美声が響く。

彼女の歌声を聞いて虜にならない者がいるだろうか。

聴衆はみな、彼方の声に聞き惚れ、ため息をついていた。

今回のソロはたったの4行だったが、聞いた者の心を掴むには充分だった。

美笛もまた、彼方の歌声の虜になった一人だった。

初めて彼方の歌を聞いたのは2年半前、高校に入学して間もないころだった。

2人の学校は中高一貫で、

彼方は高校からの編入生だった。

「すごい歌唱力がある生徒が編入してきたんだって。しかも超美人！」

噂には聞いていたが、

昼の礼拝で彼女の賛美歌を生で聞いたときは

その声量に圧倒されてしまった。

15歳の少女とは思えないほどののだ。

賛美歌に慣れない、公立からの編入生は大抵自信なさげに怖ず怖ず歌うものだ。

しかし、彼女は違った。

「神はそのひとりごを

十字架につけて

招かれる私達

全ての子どもを……」

賛美歌を歌いなれた男性教員たちに勝るとも劣らないその歌声。

今まで音楽としてというより、キリストへの信仰を示すために歌っていた賛美歌。

彼女の歌声は

美笛の賛美歌の価値観に

新しい色を塗ったのだった。

「特待生か…。」

このとき美笛にとって彼方は遠い存在だった。

「彼女が噂の特待生か」

「あんな風になれたらいいな」

「憧れるわ」

この程度にしか思ってたなかった。

まるで芸能人を見るみたいに。

しかし、彼女が聖歌隊に入ることになり、

状況は一変した。

あれだけの歌唱力を持っているのだから聖歌隊に入るのは自然なことなのかもしれないが…。

美笛は動揺した。

あんな大物と肩を並べていいのだろうか、

自分みたいなの、見下されやしないか、と。

しかし、そんな心配は無用だった。

「珍しい名前だね。何て読むの？」

練習の休憩時間、突然彼方に話しかけられた。

彼方の地声はわりと低く、少年のようだった。

「みてき、だけど…。」

美笛の胸は高鳴った。

憧れの彼方が目の前にいる。

彼女に話しかけられている。

「素敵な名前だね。」

…彼方の笑顔には、嫌らしい感じはなかった。

しかし、どこか影のある微笑みだった。

歌っているときの生き生きとした表情とはどこか違う。

彼方は自分が思っていたような人間ではないようだ。

美笛はそう感じた。

気がつけば、別人を見るような目で彼方を見ていた。

そして彼女のこともっと、もっと知りたいと思うようになった。

それからも彼方は、未熟な聖歌隊員の美笛に

色々なことを教えてくれた。

「そこちょっと低いんじゃない？この音だよ。」

そう言って、美笛のパートの音をパイプオルガンでとってくれることもあった。

「息継ぎのときは肩を動かさないで。腹式呼吸ができなくなるから。」

練習の合間に肩に触れられ、そう注意されたこともあった。

美笛は同い年の彼方を姉のように感じた。

心の中で彼方の存在が大きくなっていくうちに、

複雑な想いを彼方に対して抱くようになっていた。

続く…

3 (前書き)

年齢制限するほどではありませんが、微エロです。

3

「カナちゃん、すごかったわよ。ソロ!」

礼拝のあと、子猫のように彼方に擦り寄ってくる美笛。

「ありがとう美笛。」

彼方は美笛に優しく微笑みかけた。

今までなら、ここで美笛の頭を撫でたりしていた。

しかし、最近美笛に触れることが恥ずかしくなっていた。

美笛のことは妹のように可愛く思っている。

最初はそれほど仲良くなりたい、とは思わなかったのだが。

美笛のドジと内気さは彼方の母性をくすぐった。

よく楽譜で指を切ってしまう美笛。

痛い呻く彼女の指に唾をつけてやったりして。

放って置けなくて、あれこれ構ううちに、

美笛は彼方の心の一部になっていった。

しかし、彼方は美笛を純粹に「可愛い」と思っているだけではないことに気づくことになる。

それは夏休みの合宿のことだった。

合宿所は山の教会。

夏だというのに、気温は15度を下回っていた。

深夜、彼方は寒さで目を覚ました。

脂肪が少ない彼方は比較的寒さには弱かったのだ。

（本当に夏かよ…。）

そんなことを思いながら、独り、体を起こした。

山の空気は澄んでいる。

天窓から覗く月や星が美しかった。

ふと、隣で眠っている美笛が目についた。

彼女はぐっすり眠り込んでいた。

（よくこんな寒い中、寝てられるよな…。）

この日の昼間は、講師から美笛の指導を頼まれた。

未だに正確な音程がとれない美笛のために。

彼方は絶対音感を持っているし、ピアノも得意なので講師の助手のような存在だった。

（君ももう3年なんだから、しっかりしなきゃ駄目だよ…。）

彼方は月光に輝く美笛の黒髪を指に巻いていた。

（いいな…僕も黒髪がよかった。）

よく友人たちに鳶色の髪を羨ましがられるが、

彼方からしたらコンプレックスの一つだった。

なぜなら、赤毛には似合わない色が多い。

髪から指を離すと、

今度は美笛の寝顔をじっと眺めた。

昼間のおどおどした感じとは違う雰囲気。

（どんな夢を見ているのだろうか…。）

…無意識に美笛の頬に触れていた。

（温かい…）

彼女の体温が指を伝って全身に流れ込むような感覚。

彼方は体の芯から熱いものが溢れ出てくるのを感じた。

なぜか息も苦しくなってくる。

喉が渴く。

（美笛…）

思えば、これが最後の合宿だ。

彼方たちの高校は大学の付属校だが、エスカレーター進学する生徒は5%に満たない。

卒業したら、美笛と離れ離れになるのだろうか？

もしかしたら彼女は中国へ帰るかもしれない。

そう思うと彼方の胸はキリキリ痛んだ。

（どうしてずっとこのままではいけないんだろう…。）

このまま、17歳の少女のままでいられたら…。

(美笛：頼むから、ずっと僕の傍にいて…)

引き付けられるように顔を近づけると

そのまま美笛の唇に唇を重ねていた。

：

次の瞬間、我に返り、慌てて唇を離した。

自分は一体何をやってるんだ。

(何てことをしてしまったんだ！僕は！これが女友達にすることなのか！？)

美笛はまだ安らかに眠っていた。

その寝顔を見ながら彼方は自己嫌悪に陥った。

（僕は最低だ！純粋な美笛を汚した！最低！）

翌朝、割と器用な彼方は何もなかったように美笛に接した。

しかし、あのショックは治まるわけもなく

彼方の胸の奥で燻り続けた。

当然のことだが、それから美笛の顔を見るたびに胸が痛む。

妹のように思っていた美笛を

いつの間に「そんな目」で見ていたのだろうか、と

罪悪感いっぱいの彼方だった。

続
ぎ
ま
す。
。

夕礼拝が終わり、家路に着いた彼方。

「ただいま。」

返ってくる声はない。

「はあ。」

彼方はため息をついた。

リビングを覗くと、

まだ小学生の和也がいた。

「和也。」

和也は黙々と机に向かい、宿題をしていた。

彼からは小学生特有の輝きを感じられない。

伝わってくるのは無機質さと

どうしようもない暗さばかり。

「お母さんは？」

「病院に行ってる、美月を看に。」

和也はこちらを向かず、淡々と答えた。

母親の話題になるといつもこうだ。

母は病気の妹の世話や仕事精一杯でほとんど自分を構ってくれないからだろうか？

「そう。なら今日もきつと泊まりだね。着替えたらご飯作るから鍋の支度して。」

彼方は和也たちの母親とは血の繋がりが無い。

彼方の父はオーケストラの指揮なども務める音楽家で、実母はピアノリストだった。

父は彼方が生まれる前から、彼女を音楽の道へ教育するつもりだったらしい。

彼方が2歳になったら声楽を習わせ

3歳の誕生日からは一日中ピアノの前に縛りつけ

それはそれは厳しい練習をさせていた。

実母はそれを残酷だと嘆き、父に抗議したことから夫婦仲が険悪になった。

最終的に父は「そんなに嫌なら出ていけ」と吐き捨てて、母は泣く泣く家を出ていった。

彼方が4歳のときだった。

その3年後、父は再婚した。

彼方と15しか変わらない若い女と。

彼女の目には甘え下手で無愛想な彼方は「可愛くない子供」と映った。

彼方は彼方でこの新しい母に違和感を持った。

それで親子らしい関係を築けるわけはなく、

二人は同じ屋根の下に居ながらお互いを避けていた。

先天性の心臓病を持つ妹、美月が生まれてからはさらに面倒なことになる。

義母は美月の世話で手いっぱいになり、

自然に和也の面倒は彼方がみることになった。

当然、和也は義母より彼方に懐く。

義母はそれが面白くなかった。

なぜ自分が腹を痛めて産んだ息子を赤の他人の彼方にとられなければならないのか。

そんな矢先、父親が飛行機事故で亡くなった。

ウィーン出張の帰りのことだった。

このとき彼方は中学2年生。

本当ならここで二人は手を取り合わなければならない。

一家の大黒柱である父が亡くなったのだ。

不和になっている場合ではない。

…しかし、この家庭は逆だった。

今まで間にいた父がいなくなったことで、

お互いの不満にブレーキが効かなくなった。

ある日、義母が和也の破れた体操着を繕おうとしたときのことだった。

和也は「彼の方が上手いから彼方にやってもらおう」

と言った。

この言葉に義母は怒りを爆発させた。

怒りの矛先は和也ではなく、台所で夕飯の支度をしている彼方に向いた。

義母は家が壊れそうな勢いで台所に突っ走り、鬼のような形相で彼方に怒鳴りつけた。

「あんた、赤の他人のくせに何様なの！？なんで母親の私が和也にこんなことを言われなきゃならないのよ！あんたが和也をそそのかしたんでしょ！あんたは私から和也を盗った！この盗っ人ギツネ！」

この義母の言葉に彼方は頭に血が昇った。

何を言ってるんだ、この人は。

なんて理不尽な。

ぶちキレた彼方は

手に持っていた果物ナイフを思いっ切りザクツとテーブルに突き刺し、

ツカツカと自分の部屋へ退いて行った。

この様には和也もわなわな震えていた。

これきり彼方と義母は口を利くことはなかった。

彼方の中に、ありありと憎しみが湧き、

絶対和也をあの女に渡すもんか、と胸に誓った。

彼方にとって家庭は安らぎの場所ではなかったのだ。

続く。

学校では色んな期待をかけられる。

家庭には居場所がない。

そんな彼方が唯一生きていく実感を得ることができる時間は

音楽に接しているときだった。

最初は父から強制的に学ばされたものだが、

本当に好きでなければ今まで続けてこれなかった。

中でも声楽に惹かれた。

無機物を媒介とする器楽と違って

自分が楽器になれる。

なんの道具も使わず、自分の声だけでメロディーを「奏で」られる。

こんな素晴らしいことがあるだろうか。

習うのは専らクラシックだが、

歌なら何でも好きな彼方は

ロック、ポップスや演歌のボイストレーニングも独学で始めていた。

「君も見ているだろう

この消えそうな三日月…」

今日も誰もいない聖堂にピアノの音と彼方の美声が響く。

その様子を扉の影でじっと見守る美笛。

（何気なく歌っているのに、カナちゃんの歌は心惹かれる。

誰が作った歌だろうと、口に出した途端、カナちゃんのものになる。

やっぱり天才なのかな？

それに比べて私は…！）

そのとき、歌声とピアノが止んだ。

「美笛、いるんだろ？」

「…っ！」

全く、彼方は鋭い。

美笛は怖ず怖ずと扉の中へ進み出た。

ステンドグラスからの光が眩しい。

「時間が空いたからお祈りに来たの。そしたらカナちゃんの歌声が聞こえたから、何だかいつまでも聞いていたくなって…。」

美笛は照れながら言った。

彼方は愛おしそうに笑う。

「本当に美笛は敬虔だな。防音室が空いてなかったから聖堂を借りたんだよ。……そういえば美笛の教会は聖公会だろ？教名はあるのか？」

そう、英国国教会である聖公会は教名（洗礼名）を授ける。

「『アグネス』よ。」

美笛は誇らしげに答えた。

いつも自信なさげな彼女には珍しいことだ。

「アグネス？あまり聞いたことがないね。」

彼方は首を傾げる。

「古代ローマのアグネスよ。3世紀ころ、12歳で殉教したアグネス。ラテン語で『子羊』という意味なの。」

彼方はふと思い出した。

そう言えば聞いたことがある。

3、4世紀ころ、古い宗教を重んじたディオクレティアヌス帝の下で殉教したといわれる12歳の聖女アグネス。

町中を全裸で引きずり回されるという拷問を受けたが、急に彼女の髪が伸び体が隠された、

火に投じられても死なず、最期は斬首された、などの伝説を持つ。

彼女は

「キリストは私の花婿です。

私を最初を選んで下さったのはキリストですから、その方に従います。」

と言って亡くなった。

「∴私もそこまで信仰を通せる人になりたいの。」

美笛は目を輝かせていた。

彼女は洗礼を受けたときの感動を思い出していた。

洗礼を受けたのは10歳のとき。

洗礼式は教会の近くの湖で行われた。

美笛が使徒信条を唱えたあと、

主教は彼女をザバツと水に沈めた。

そのとき、目の前の水面が太陽の光でキラキラ光って美しかったことを覚えている。

美笛はクリスチャンになれたことでそれまでより前向きになることができたのだ。

「…君は神様のために死ねるの？」

彼方は複雑な思いだった。

「死ねるわ。」

美笛はきっぱりと言いつつ放った。

相手が神では嫉妬する気にはなれない。

しかし、それが蟠りの源だった。

こんな敬虔で純粋な美笛だから好きになった。

なのに……自分はそんな彼女に対してありえない想いを抱いている。

背徳的な想い、

神に背いた想いを。

それがすごく後ろめたいのだ。

続きます。

…実を言うと、美笛も同じだった。

美笛は彼方に憧れ、姉のように慕っていた。

彼方のようにになりたい。

彼方の行くところならどこでも行きたい。

彼方の読んだ本なら全部読みたい。

彼方が歌った歌なら自分も歌いたい。

美笛はそう思って

彼方が図書館で借りた本を全部チェックして、自分も借りたり、

彼方が練習している歌の楽譜を集めたりした。

ここまでなら思春期の少女にありがちなこと。

…しかし、その想いもどんどんエスカレートしていく。

彼方のことを想うたび胸が痛くなる。

彼方に触れられると心臓が高鳴る。

「カナちゃんの制服のリボンになれたらいいのに。そしたらずっと一緒にいられる。」

などと、彼方の持ち物にさえ羨望を抱いてしまう。

彼方と二人で過ごす時間が訪れるたび

「このまま時間が止まったらいいのに。」

と思ってしまう。

……さすがにこれは「憧れ」や「友情」を越えてしまっているのではないか？

美笛は自分を疑い始めた。

だが「そんなわけない」と掻き消そうとした。

こういう気持ちは本来男性に抱くものなのだ。

だいたい自分はクリスチャンである。

何よりも神を愛している。

自分と同じ罪深い人間にそこまで執着してはいけない。

…そんなとき、美笛が自分の想いを確信してしまうようなことが起

きてしまう。

今年の春休み、美笛はいつもの杏の教会に祈りに行ったときのこと。

もうすぐ花が咲くだろうからゆっくり杏の木を眺めようと

教会の庭に出た。

そのとき、一番奥の杏の木の影にうずくまっている赤毛の少女が目に入った。

…彼方だ。

美笛は声をかけようと思ったが……

何やら様子が可笑しい。

美笛が様子を伺おうとした、

そのとき

彼方がスッと立ち上がった。

美笛は反射的に聖アンデレ像の後ろに隠れてしまった。

彼方は美笛に気がつくことなく、アンデレ像の前を通り過ぎていった。

「……………」

可笑しい。

鋭い彼方なら気づくはずだ。

不安になった美笛はそうと像の後ろから覗き込んだ。

「……………!？」

：

彼方の頬に伝う涙。

泣き腫らした目…。

彼方は腕で涙を拭くと、教会の向こう側へ消えていった。

：美笛は2つのショックを受けた。

彼方には気が強くてサバサバしたイメージしかなかった。

そんな彼方に何があったのか。

いつもここで泣いているのか。

これが1つ目のショックだ。

ごく普通の友人としての心配。

2つ目のショックは自分に対してである。

実はこっちの方が大きい。

美笛は

…彼方の泣き顔に恍惚としていたのだ。

「美しい」と思った。

この世にあんな美しいものがあつたなんて…。

「自分のものにしたい」と思ってしまった。

自分が泣かしたい、と。

…なんてことだろう。

その日はずっと、彼方の泣き顔がちらちら頭に浮かんできて落ち着かなかった。

心配しているのも事実。

しかし、それよりもあの涙を見たとき高揚感…。

美笛は本格的に混乱した。

懺悔では済まされまい。

女友達の彼方にこんな想いを抱くなんて。

もう神の前に顔向けできない。

（神様、私は罪人です…。）

敬虔なクリスチャンである美笛は自分が許せなかった。

しかし

いけない、いけない、と思うほど

燃え上がるこの想い。

この燦る想いと

クリスチャンとしての誇り

との間に板挟みになり

美笛は苦しんだ。

続く。

彼方への想いを自覚してからというもの、

美笛はこれまでに増して神に祈るようになった。

今まで朝とたまに昼と夕方くらいしか祈ってなかったものの、

今では朝、昼、夕と欠かさず祈っている。

さらに通常15分程度で済ませる祈りを1時間以上行っている。

（主よ

私を罪から救って下さい！

彼女は私の大切な人です。

彼女には無垢な愛を捧げたいのです。

私は主の婢として、純潔を守らなくてはいけない身。

主よ、どうか私からこの邪な感情を取り去って下さい。」

美笛は十字架の前にひざまづき、一心に祈っていた。

…

「あの…美笛を見ませんでしたか？」

彼方は、美笛のレッスンを担当している講師に尋ねた。

「ああ、多分聖堂で祈ってるわよ。

このごろ可笑しいと思わない？彼女。

元々信心深いのだろうけど…。

宗教センターの人も心配していたのよ。今年の春あたりからなんだから思い詰めたように祈ってるんだって。」

講師は疲れたような顔で語った。

「…そうですか。」

彼方は不安になった。

美笛は何でも自分に話してくれているはず。

悩み事があったなら、自分に相談してくれてもいい。

それとも何だろうか？

自分には言えないことなのか？

「それにしても、彼女は声楽には向いてないわ。

喉の筋肉が弱すぎるの。肺活量もないし。

私も長いこと音楽を教えているけど、あんな音痴は見たことないわ。まあ、それ以前に人間性もあるかもしれないわね。

祈ってる暇があったら練習すりゃいいのに。

どうしてこんな音楽の名門校に入れたんでしょうね。不思議でしようがないわ。

類は友を呼ぶって言うけど…

本当に貴女の親友とは思えない。」

講師は呆れ口調でしゃあしゃあと美笛の悪口を並べた。

彼方はキレそうになった。

なぜそこまで言われなければならない？

この人に美笛の何がわかる？

美笛の何を見ている？

声量、音程などが声楽の全てなのか？

自分は美笛の優しい声が好きだ。

賛美歌を歌っているときの輝く瞳が好きだ。

それらは美笛の人柄と彼女のキリスト教信仰からであると信じている。

確かに周りをあつと言わせるだけの歌唱力はないかもしれないが、

彼女には彼女の歌い方がある。

なぜ、人間性がどうか、

祈る時間があったら練習しろなんて言われなければならない？

この人の目は節穴なのか？

「……失礼しました！」

彼方は怒気を含んだ声でそう言うと、

バシンと戸を閉めて出ていった。

どうやら彼女は

怒ると口ではなく、態度に出してしまうらしい。

続く。

彼方が聖堂に入ると、

美笛はまだ十字架の前でひざまづいて祈っていた。

いつもは聖女のような穏やかな表情で祈っているのだが…。

今は何かを訴えているかのようにだ。

「美笛。」

彼方の呼びかけに美笛はバツと振り返った。

「カナちゃん…。」

美笛はややたじろいだ。

彼方の表情が怖かったからだ。

多分先程の講師への怒りが収まらないからだろう。

「君は最近追い詰められたように祈っているそうだね。何か悩みでもあるのか？」

「別に……。」

本当のことなんて言えるか。

一応否定はした。

しかし、それで納得するような彼方ではない。

「僕には言えないことなのか？」

彼方の声は悲しげだった。

今までの美笛は何でも彼方に相談していたのだ。

美笛は何も言えずに俯いていた。

勘のいい彼方なら大抵のことはピピツとくる。

事実、「これは何か隠しているだろう」と感じていた。

しかし、その内容となるとほとんど見当がつかないのだ。

唯一見当がつくことと言えば…

「アイツの言う事なら気にすんなよ。」

そう、先程の講師のこと。

レッスンの講師に厭味を言われて落ち込んでいる、と彼方は考えた

のだ。

：美笛は知っていたのか、という風に顔を上げた。

「もう一度言うけど、僕は美笛の声が好きだ。君がどんなに歌が好きなのかは僕が知っている。あんなメクラ講師の言う事なんぞ気になくていい。」

「カナちゃん…。」

「好きだ」という言葉に、美笛はドキリとした。

「そういう意味」で言ってるわけでないことはわかっている。

しかし、「好きだ」と言われると、体の中心から熱いものが溢れてくるような感覚になる。

講師に厭味を言われて落ち込んでいるのも事実だ。

美笛はほっとした。

そういうことにしておけば、これ以上怪しまれない。

「…カナちゃん、歌を習い始めたのは何歳？」

美笛は十字架を見上げたまま、彼方に尋ねた。

彼方はいきなり何だと眉間にしわを寄せた。

「……2歳だけど？」

「私は11歳のときだから、カナちゃんより10年近くも遅れてるわ。

そのうえ才能ないだの、いくら練習したって素質が悪いから無駄なんて言われるようじゃおしまいね。

卒業記念コンサートの練習ももうすぐ始まるのに…。」

彼方たちの高校は毎年、卒業記念としてコンサートを行う。

「きっと私は出させて貰えないわ。」

卒業記念なのだから基本的に全員参加なのだが、あまりに出来の悪

生徒は強制的に休まされることがあるらしい。

学校のメインイベントであり、

名門校なのだから尚更。

美笛は自嘲していた。

もう悔しいとも思えない。

こんなことには慣れっこなのだ。

（やだ…。また愚痴ってしまったわ…。）

美笛は、恐る恐る彼方の方を向いた。

「…!？」

ビビってしまった。

彼方の顔が怒りで真っ赤だったからである。

「か、カナちゃん!？」

美笛は思わず後ずさりした。

彼方は肩を震わせ、呻くように言った。

「…美笛がそんな目に合わされたら……僕黙っちゃいないよ?」

「カナちゃん…。」

本当に彼方は姉のようだ。

「曲は何?」

「……『panis angelicus, 天使の糧』よ。」

彼方はなるほど、と思った。

『天使の糧』は子供のためにあるような曲。

音域が狭く、音程を取ることが苦手な美笛にも歌えそうだ。

しかし、キリスト教音楽ではあるので、クリスチャンの美笛には相応しい。

「美笛、土曜日のレッスンの後、いつもの教会で徹底的に練習しようか。」

「え？」

「厭味ばかり言う講師よりはいくらかマシなレッスンができるよ。」

続く。

「当然ながら、卒業コンサートの大取りは君だ、岡咲。」

音楽科の主任が誇らしげに言った。

「ありがとうございます。」

彼方は深々とお辞儀をした。

そして真剣な顔つきで主任を見ると、こう尋ねた。

「ところで、桜川美笛さんは今回のコンサートには参加させていた
だけないのですか？」

…思いがけない質問に主任は目を見開いた。

「そ、それは…難しいところだろうね。」

「練習なら私がみますから。」

「いや。しかしね…、野木先生（厭味講師）の話を聞くと、いくら練習しても上手くならないそうだし。彼女はすぐ声帯炎になってしまいうしね。」

だいたい根性が足りないんじゃないか？

最近頻繁に祈りに行ってるみたいだけど、そんなことをする暇があったら、もっと練習すればいい。やる気がないとしか思えない。我が校の汚点だ。君もアレとは付き合わない方がいいと思うがな。」

…大切な美笛を「アレ」などと言われて彼方の中で何かが切れた。

彼方は近くにあった、椅子を引っ張ってくると

主任の前にガンと置いた。

そして椅子の上にと主任を見下ろしながらこう言った。

「おい、あんた先生だろ？ここクリスチャンの学校だろ？主任のくせに、あんなメクラ講師の言うことまんまと信じてふざけんな。」

「……!？」

いつも真面目で従順だった彼方の豹変ぶりに主任は啞然としていた。

「できない奴は処分してできる奴だけ伸ばそうって？それがここの教育方針なわけ？」

それで教育って言えるの？飼育の間違いじゃないの？」

「岡咲…。」

「そうやって人のアラ探しばっかしてさ、美笛の何を見てんの？全然彼女のいいところ見つけようとしてないじゃん？」

アラ探しと厭味しか能ない教員に教育なんて無理。せいぜい飼育がいいとこだわ。」

呆然と固まる主任。

彼方はふっと息を吐くと椅子から降りた。

「ま、とにかく、桜川さんをを参加させないと言うのなら、私も出ませんから。」

美笛を見捨て、自分だけ安全圏に行くなどと、彼方にはできなかったのだ。

「わ、わかった。わかったから、落ち着いてくれ、岡咲。私が悪かった。野木先生には私から言っておくから…。」

主任は必死で彼方を宥めた。

「わかって下さればいいんです。」

彼方は冷めた声で言った。

主任は本当にわかったわけではない。

特待生の自分にボイコットでもされたら学校の名誉に関わるため、自分の言うことを聞き入れようとしていることを知っていた。

しかし、これ以上の議論は不毛だ。

「課題曲はパーセルの『夕べの賛歌』とプッチーニの『私のお父さん』でしたよね？自由曲は私が決めてよろしいんでしょうか？」

いつのまにか彼方はにこにこしていた。

「あ、ああ。」

主任はまだびくびくしている。

「では、よろしく願いしますね。」

彼方は艶やかに教室を出ていった。

彼方のすらりとした後ろ姿を見送ると

主任はへなへなと床に崩れた。

続く。

10（前書き）

やや残酷です。

「いつくしみふかき

友なるイエスは…」

土曜のレッスンを終えた彼方は賛美歌を口ずさみながら帰宅していた。

家の門をくぐり、ふと、庭を見ると…

義母の自転車が止まっていた。

（ん？もう帰ってるのか？）

大抵彼方の方が義母より早く帰るのだが、

こういうこともたまにある。

ドアに手をかけたが、何やら中が騒がしい。

そうっとドアを開けると：

ガンッ、ガンッと何かを打ち付け合うような音と

「死ね！死ね！死ねええ！」

義母の憎しみ一杯の叫びが聞こえる。

何事だろうか…？

彼方は気づかれないようにリビングをそつと覗いた。

そこには衝撃的な光景があった。

義母は、彼方が義母と和也のために作り置きしていた夕飯をゴミ箱に捨てていたのだ。

父が亡くなってからというもの、炊事をはじめ、家事は全て彼方の仕事になった。

自分の帰りが遅くなるときはいつも夕飯を作り置きしていた。

義母は

あの和也の体操着事件以来、

力が強くて体も大きい彼方が恐ろしくなってきたのか、

直接的に厭味をいったり、罵声を浴びせたりするようなことはなくなった。

無視一点張りだった。

しかし、影でこんなことをしていたなんて…。

「死ね！死ね！」

義母は鬼のような顔で皿をゴミ箱に打ち付けていた。

それはもう、皿が割れてしまいそうな勢いで。

リビングの隅っこでは、その光景を呆然と見つめる和也の姿があった。

思い詰めたような目をしているが、

どこか「もうこんな見慣れてます」と語っているような目だった。

「何が声楽だ、何が特待生だ、あんな汚物以下が歌う歌なんぞ誰も認めねーよ！」

義母は料理を全部投げ捨てると、

今度は皿を壁にぶつけ始めた。

「売女！盗っ人！一円女郎！男女！下衆！畜生！お前なんかどっかのヤクザにでも犯されて、殺されちまえばいいんだよお！」

一体どうしたらそこまで悪口が思い浮かんでくるのかと感心してしまいうくらい

義母は彼方への罵詈雑言を並べ立て、

壁に皿を投げつけ続けた。

パリン、パリンと皿が割れる音が響く。

和也は身を縮めて耳をふさいでいた。

最近どうも皿が減ると思ったらこういうことだったのか。

…彼方にはもう、キレル気力もなかった。

主任に抗議したときのようになら、人のためにならキレル気にもなるが、もう自分のためにキレル気にはなれない。

あのときのような憎しみも込み上げてこなかった。

あるのはただ、悲しみばかり。

なぜ上手くやっていけないんだろうか。

自分に可愛いげがないからだろうか。

もっと義母を立てるべきだったのか？

そりゃあ、彼女が好きではないが、本当は上手くやっていきたいに決まっている。

親子になれたのも縁があつてのもの。

こんな不和が嬉しいものか。

彼方は冷めていた。

これでは中に入るわけにもいかず、

再び外に出た。

彼方は庭先の薔薇の木の下にうずくまった。

この薔薇は彼方の実母が植えていったものだ。

彼方はどんなに忙しいときでも手入れをかかさなかった。

実母の消息はもうわからない。

…この後美笛のレッスンだ。

こんな気持ちで美笛に会うわけにはいかない。

けれど、あの教会で美笛が待っている。

美笛が…。

彼方は一人、制服のスカートを握りしめていた。

続く。

そのころ、美笛は教会の祭壇の前にひざまづいて祈っていた。

（これから彼女とのレッスンです。

主よ、私を試みにあわせず、悪よりお救い下さい！

悪魔の誘惑から私をお守り下さい！）

彼女は組んだ指に力を込め、一心に祈っていた。

そのとき

「アグネス美笛。」

…突然教名を呼ばれ、振り向いた。

そこには白い装束を身に纏った司祭がいた。

この司祭は美笛が洗礼を受けたときから、彼女を温かく見守っている。

「司祭さま！」

「今日も礼拝に来てるなんて。貴女はこの教会で一番熱心な信者ですよ。」

司祭は美笛に優しい微笑みを向けた。

「もったいないお言葉です。」

美笛は深々とお辞儀をした。

「しかし、最近の貴女は熱心を通りこして必死な気もする。何か悩みでもあるのですか？」

「いえ…別に何もないです。」

美笛は気まずそうに顔をそらせた。

司祭はそんな美笛を見つめて、ため息をついた。

「気づいていないのですか？」

今だって親を亡くした子供のような顔をしていますよ?」

「……!」

美笛は拳を握りしめた。

「言いたくないなら構いません。」

…しかし、私は懺悔聴聞僧です。アグネス美笛。

私に隠しだてすることは神を欺くと同じこと。」

美笛は悩んだ。

言いづらい、

とても言いづらい。

しかし、このままずっと自分の胸に秘めておける自信もない。

何より、クリスチャンとして、どうするのが正しいか。

…覚悟を決めた美笛は

言葉にできない彼方への想いを

何とか無理矢理言葉にして司祭に伝えた。

「司祭さま、私は罪人です！」

大切な親友をこんな汚らわしい目で見るなんて！

私にはクリスチャンでいる資格なんてありません！

心の中からこの邪な感情が取り去れないのなら、

私は死ぬ覚悟です！」

美笛はそう言うと、司祭の足元に身を投げ出した。

「…『そんなこと』で自ら命を断つ方がよっぽど罪ですよ？
アグネス美笛。

神から授かった命をそんな粗末に扱うものではありません。」

司祭の厳かな声が天から降ってくるようだった。

「司祭さま…！」

司祭はしゃがみこんで美笛と目線を合わせた。

「イエスさまは私たち一人ひとりを愛しておられます。

私たち人間の弱さもきちんとご存じなのです。

何があっても、貴女は神様に愛された存在なのですよ。

ましてやそんなことでクリスチャンでいる資格を失うわけではありません。」

司祭は美笛に力強く言い聞かせた。

司祭は美笛の言葉以上のことをわかっていたようだ。

「司祭さま…！」

「愛は形を変えるものです。

今のような性愛（Eros）から

無償の愛（agape）に。

弱さは誰にでもあります。

だからこそ排除するのではなくて、認め、包むのです。」

司祭は美笛の肩に手をおいた。

「司祭さま…。」

「貴女は充分、立派なクリスチャンですよ。

神のご加護を…。」

司祭は立ち上がると

美笛の頭に手を置いて祈った。

美笛の心は少し救われた。

続く。

11（後書き）

※私は聖公会の司祭とは話したことはありません。

12 (前書き)

やさしさわりがある内容です。

「アレルヤアレルーヤ〜…」

少し心が軽くなった美笛は

彼方が来るまでの間、

発声練習をしていることにした。

美笛の細い声は、

この広い教会の空気に飲み込まれてしまうようだった。

（まだまだ肺活量が足りないわ。）

美笛は腹筋を鍛えようと

床に腰を下ろした、

そのときだった。

「待たせたな。」

彼方が教会の扉を開けた。

彼女は覚束ない足取りで美笛に近寄ってきた。

「いいのよ、カナちゃ……………」

美笛が言葉を切ったのは

彼方の表情を見て、

胸が潰れそうになったからだ。

「…じゃあ、始めよっか。」

彼方は一時停止状態の美笛を置いて

パイプオルガンのスイッチを入れた。

「カナちゃん……」

「ん？」

「…どうしてそんな悲しそうな顔をしているの？」

彼方のどこかこらえたような面持ちに美笛は気がついていた。

それがわからないほど美笛は鈍感ではない。

彼方のそんな、悲愴な顔をみるのは美笛にとってつらいことだった。

見るに忍びなかった。

「何かあったの？話して、カナちゃん…。」

「……………」

彼方は何も言わず、ただ、俯いていた。

（やっぱり何かあったのね。）

「大丈夫よ。私がついてるわ。」

美笛がそう言って、彼方に歩み寄ると

彼方は突然

ガクツと床に膝をついた。

「カナちゃん…！」

彼方の肩は震えていた。

俯いていて表情はわからない。

しかし、彼女の長い赤毛の奥から

雫が1滴、2滴と落ち

床を濡らしていた。

「カナちゃん…！」

美笛はまた自分との闘いに迫られた。

あの言いようない衝動がまた自分を襲ってきたからだ。

（神様……！）

美笛はさすがのように天井を仰いだ。

天使たちが空から地上を覗き込んでいる絵が目に入る。

このまま立ち尽くしているわけにもいかない。

美笛は彼方を落ち着かせようと

彼方の手をとった。

そのとき

彼女の制服のカーディガンの袖の中から

無数の傷痕が見えた。

しかもいまさっきつけたような傷で血がにじんでいた。

「……………っ！」

美笛は息を呑んだ。

その瞬間、美笛から狂おしい衝動がふつとんだ。

（カナちゃん…！）

そのかわり、美笛も胸に傷を負った。

『弱さは誰にでもあるものです』

司祭の言葉が蘇る。

（何をまごついているの！カナちゃんが傷ついているのよ！それでも友達なの？クリスチャンなの？）

美笛は自分を叱りつけると

彼方を抱きしめた。

「私は何も聞かないわ。

ただ、胸を貸すだけよ。

：傍にいるから。

私はいつでもカナちゃんの味方よ。」

美笛は彼方を抱きしめたまま、神に祈った。

（主よ、私に愛されるより愛することを望ませて下さい。

私は今まで彼女に助けられてばかりでした。

今度は私が彼女を助ける番です。

私は彼女を愛しています。

どうか彼女と同じ傷を私にも負わせて下さい。

彼女と同じ苦しみを私にもお与え下さい。

彼女が喜ぶとき、私も喜び、

彼女が悲しみの中にいるとき、私も共に悲しみたいのです。

：アーメン。）

美笛の彼方に対する愛が衝動に勝った瞬間だった。

恋人でも

友人でなくてもいい、

ただ彼方を愛し続けたい。

彼方の味方でありたい。

美笛はそう思った。

続く。

「やっぱり岡咲さんいないとソプラノ響かないわねー。

というか、彼女がいないからって自信なさげにモゴモゴ歌わなくなっているでしょ！全く皆して…。

岡咲さんが卒業したらどうするつもり？」

聖歌隊指導の講師が脱力したように苦笑する。

今日の彼方はレッスンで聖歌隊の練習に出られなかった。

「とくに桜川さん！

ベートーベンの『Joyful, Joyful（歓喜の歌）』はリズムカルな曲なんだから、直立不動でじめじめ歌うのはやめて！アルトがそんなでどうするのよ！

合唱で一番大事なのはメロディーじゃないの！低音部なのよ！もう！」

美笛は苦笑いをした。

「先生、次の講演会がですね、岡咲先輩、レッスンが入っててこれないそうですよ。『Creolen Dios』のソロはどうする

んですか？」

2年生の隊員が尋ねた。

「ああ！それがあった！」

講師はますます困惑して頭を掻きむしった。

「あゝどうしよう、えーと………YOU！」

講師が指さした先は…

「え？私ですか？」

美笛だ。

美笛はまさか自分に当たるとは思ってたらしく周りをキョロキョロ見回した。

「貴女の他に誰がいるのよ！ソロを歌ったことない3年生は貴女だけよ？」

「で、でも私は下手くそですし…。」

美笛は首を横に振った。

美笛のレッスンを担当している講師、野上はいつまでたっても音痴な美笛を教える気無くし、最近レッスンをボイコットしている。

『馬鹿にすんのもいい加減にしてくんない？やってらんないわ、だって貴女教えがいないし、お先まっくらなんだもの。いつも貴女を教えてる岡咲さんは立派だわ。』

そのこともあってか、最近ますます自信をなくしている。

「何情けないこと言ってるのよ！声楽科の3年生でしょ？もし少年合唱団だったら、次誰にソロが回ってくるかわからないのよ？すぐに声変わりしちゃうんだから。」

「……………」

美笛は自信なさげに俯いた。

講師はふうと息を吐くと、

そんな美笛の肩に手を置いて

穏やかにこう言った。

「貴女、卒業記念コンサートに出させて貰えるそうよ。岡咲さんのおかげで。」

「え?」

（なんですって!）

「岡咲さんね、なんで貴女だけコンサートに出させて貰えないのかって主任に抗議したそうなの。主任も驚いていたわ。」

（カナちゃん…!）

「だからしっかりなさい。」

講師はそう言うと、指揮壇に戻り、指導を再開した。

（またカナちゃんに助けられてしまったわ…。）

コンサートに出れることになって嬉しい気持ちより、

彼方に申し訳ない気持ちの方が大きかった。

続く。

教会にはパイプオルガンの音色がよく似合う。

日の沈んだ教会で練習に励む二人を

絵の中の殉教者たちだけが見守っていた。

「音程のことはこの際忘れてくれ。この歌は子供になったつもりで無邪気に歌って欲しい。」

こんなことを言うのは彼方くらいである。

講師からは「音痴」、「つんぽ」、「鈍感」などのけなし言葉ばかり言われていた。

「でも発音だけは注意して。
ラテン語の”u”はすごく綺麗な音なんだ。なるべく口を尖らせず

に発音してくれ。そもそも口を尖らせて『ウ』と言うのは日本語くらいだから。」

彼方の声はしっかりしていた。

美笛はホッとしていた。

いつものサバサバした彼方だと。

手首にも新しい傷はなかった。

癖というわけではなくて

きつとあるときだけ特別だったんだろう。

「…何ボーっとしてんの？」

彼方がやや厳しい声で言った。

彼女の大きな瞳がキツと光る。

「…あっ…ごめんなさいっ。」

美笛は肩をすくめると照れながらこう言った。

「カナちゃんの声、聞き心地がよくて、ついぼんやりしてしまったの。」

確かに、彼方は歌が上手いだけでなく、

声そのものが美しい。

歯切れもよく、どこか威厳を感じる低音だ。

「そう？こないだセールの電話に出たら、『息子さんですか？』
って言われたんけど。」

彼方は眉間にシワをよせ、不愉快そうな顔をした。

「まあ！やだあ！」

美笛はくすくす笑った。

「笑わないでくれよ。」

事実、彼方の声は一瞬少年か少女か迷う。

見た目はモデル系の美少女であるのに。

「何で今ごろそんなこと言うのさ。僕の声ならこの3年間、ほぼ毎日聞いてたじゃん？」

そりゃそうだ。

何で今更。

彼方がそう思ったのも無理はない。

「ううん、いままでずっと思ってたの。急に言ってみたくなっただけよ。」

美笛はにこにこしてそう言った。

彼方は何かひっかかるような感じがしたが、

受け流すことにした。

いままで何気なく聞いていた彼方の声を改めて美しいと感じた。

それは美笛があることを決心していたからだ。

続く。

「もう12月も半ばだっていうのに全然雪が降らないなあ…。」

彼方は夕飯の支度をしながら、

窓の外を眺めた。

そういえばもうすぐクリスマスコンサート。

彼方の学校のメインイベントの一つである。

クリスマスコンサートが終わり、年が明ければすぐ卒業記念コンサート。

そして定期考査が終われば、3年生は入試のためすぐ春休みに入る。

彼方は国立の音楽短大に進学を決めていた。

美笛はどうか知らないが、

なるべく遠くには行ってほしくない。

「和也も育ちざかりだから、もっと食べさせないと駄目かなー。」

彼方は炊飯器に目を移した。

今日も義母は美月の入院している病院へ行ってる。

また和也と二人きりである。

ピンポーン

玄関のベルがなった。

カメラを覗くと、

学校帰りの和也と和也の親友、賢一がいた。

（賢一君まで…どうしたんだろう…。）

賢一の家は反対方向である。

大抵大通りの交差点で別れる。

不思議に思いながらも

ドアを開けた。

「おかえりなさい。賢一君までどうしたの？」

賢一は気まずそうな顔をして口をもごもごさせている。

これは何か事情がある、と彼方は思った。

「和也、先にお風呂入っちゃいな。」

彼方は和也を立ち退かせた。

すると、賢一は重い口を開き始めた。

「お姉さん、最近和也変なんです。」

「え？」

和也はいつも変ではないか。

「体育のとき、いつも倉庫の中で着替えてるんです。今日、あいつが心配になってこっそり見に行ったら…」

賢一は言葉を切ると、辛そうな顔をして

ぱっと目を覆った。

一体何があったというのか。

「和也の体にあざとか、引っかき傷がたくさんできてたんです！ど
うしたんだって聞いても答えてくれないし…。」

賢一の顔は真っ青だった。

「……。」

彼方は驚いて口が利けない。

「学校ではずっと俺と一緒にだから、多分家で何かあったのかなって
…。」

賢一はトレーナーを握りしめてくしゃくしゃにしていた。

……

ちょうど和也は風呂に入っている。

彼方は賢一の言ったことを確かめるべく、

風呂場へ向かった。

和也はシャワーを浴びているところみたいだ。

彼方は和也に気づかれないよう、戸の隙間からこっそり中を覗いた。

「……………！」

：賢一の言ったとおりだった。

和也の華奢な体は

青あざや

大きなフォークかなにかで付けたような生々しい引っかき傷が

惨たらしくついていたのだ。

それも腕や脚などの目立つところではなく

背中や腹などの目立たないところに。

彼方は戸を破るように開けると

和也の肩を掴んでゆすりながらこう叫んだ。

「どうしたのさこの怪我は！？お母さんにやられたのか！？」

「……………」

和也は無機質な顔で彼方を見ていた。

とても10歳の子供がするような表情ではない。

「話して和也！！」

「……………」

和也は口を割ろうとしない。

母をかばっているのか。

彼方に不愉快な想いをさせないためか。

多分両方だ。

「和也……。」

彼方は服が濡れるのも構わず泣きそうな想いで和也を抱きしめた。

義母は彼方に対して罵詈雑言を並べたり

皿を壁に投げつけるだけではあきたらず、

とうとう実の息子の和也にまで当たるようになってしまったのか。

彼方はどうしたらいいのかわからない。

義母はそんなに彼方が憎くて憎くて仕方ないのか。

直接彼方に当たれないからまだ小さい和也に当たっているんだろう。

それとも何だろうか。

仕事や美月の世話におわれすぎて

とうとう発狂してしまったのだろうか。

「ごめん……和也……。」

彼方は決して決して涙もろい人間ではない。

ましてや人前でなんて。

それも弟の前でなんて。

しかし、この日だけは

和也の肩で泣き続けた。

続く。

16 (前書き)

やや残酷です。

彼方は家を出ていく用意を着々と進めていた。

亡き父は彼方に十分な遺産を残してくれた。

高校を出たらそれらを資金にして一人暮らしをすることを

ずっと前から決めていた。

最初は自分一人で出ていくつもりだったが、

こんな状況では和也も連れていかざるえない。

：

「お母さん。」

彼方は台所で湯を沸かしている義母に声をかけた。

彼方が義母に声を描けるのは約4年ぶりのこと。

すると義母は阿修羅のような形相で振り向いた。

「……………アンタに『お母さん』なんて呼ばれる筋合いはないわ。虫ずが走るのよ!」

憎しみいっぱいの凄みのある声だった。

しかし、彼方はびびる様子がない。

「僕、この家を出ていきます。」

彼方は毅然としていた。

義母は鼻で笑ってこう言った。

「あっそ。食いぶち減って助かるわ。ていうかそんなこといちいち宣言しなくたって、勝手に出ていけばいいのよ。アンタなんていなくなっただって誰も困りゃあしないんだし。」

義母はしゃあしゃあと言ったのけた。

家のことをする人間がいなくなったら困るくせに。

しかし、彼方は冷静だった。

まるで何かを諦めたように。

「……和也も連れていきます。」

この言葉に義母は目の色を変えた。

「はあああ?」

彼女は馬鹿にしたような声でそう言うと、

台所の引き出しから出刃包丁を取り出した。

これには彼方も少し恐怖を感じた。

殺されるのだろうか。

義母は出刃包丁を彼方の喉元に突き付けると、

嘲笑を含んだ声でこう言った。

「何寝ぼけたことぼざくのよ。

なぜ実の母親の私が居候のアンタに和也を奪われなくちゃいけないのよ。

和也がちよつとアンタに懐いてるからって調子こかないでくんない？ 自惚れもほどほどにしなさいよね。」

出刃包丁の先が彼方の喉元から顎へと移動していき、

ツーツと彼方の薄い皮膚を裂いた。

彼方の細い首に真っ赤な血が伝う。

父はこの家と多額の生命保険を残した。

彼方は父が亡くなってからの4年間、学生ながらも家事を全てこなした。

なぜ「居候」などと呼ばれなければならないのだろう。

可愛いげがないからだろうか。

生意気だからだろうか。

全部自分の責任なのか。

彼方は胸が張り裂けそうになりながらもなんとか義母を直視した。

義母の瞳にはやや狂気が潜んでいた。

（正気じゃないのだろうか…。病院連れてった方がいいのか？）

真面目にそんなことを思いながらも彼方は突き刺すように言った。

「だって貴女、和也に暴力振るうじゃない。」

この言葉に義母は怒り狂った。

義母は顔を真っ赤にすると、

「この疫病神が！」

と叫び

彼方に出刃包丁を投げつけた。

そしてコンロにかかったやかんを手にもった。

「それ以上言いがかりをつけるとこの熱湯をぶっかけるわよ？」

もうその声も表情もこの世の者とは思えない。

彼女の黒い髪が逆立って見えた。

やかんはコンロから外してもまだシュンシュン、シュンシュンと煮えたぎっている。

さすがに彼方もおそれおののき、身を縮めた。

…次の瞬間、バシッと音がした。

…しかし、湯がかかった感覚がない。

彼方は恐る恐る顔を上げた。

「和也！」

…なんと、熱湯を被ったのは和也だった。

彼方をかばったのだ。

彼の小さな体から白い湯気がたっていた。

これには義母も驚いて咄然としていた。

「馬鹿！僕なんてかばうんじゃない！」

彼方はまた和也の肩を掴んで揺すった。

相変わらず和也に表情はない。

「……行くの？和也。」

義母は力が入ってない声で言った。

和也は母の方を向くと、黙って頷いた。

義母は狂人のように目を光らせるところ叫んだ。

「もういいわ。あんたなんて私の息子じゃない！もう二度と顔みせんな！」

果たして本当にこれは彼女の本心だったんだろうか？

彼方は真剣にそう思った。

「お世話になりました…。」

彼方は悲しげな声でそう言うと、

和也の手を引いて家をあとにした。

続く。

休日の早朝。

年明けは間近。

ステンドグラスから輝かしい朝の光が差し込んでいたが

教会の空気はひんやりとしていた。

それでも彼方はいつものように練習をしていた。

家で練習しても構わない。

しかし、コンサートの会場は広いのだから、狭いところで練習してもさじ加減がわからない。

何よりも近所迷惑だ。

「O mio babbino caro,

(ああ、愛しいお父様)

mi piace,

(私あの方を愛してるの)

e bello, bello;

(あの方はとっても素敵なの)」

彼方の鈴を転がすようなソプラノの声は、

聖堂にある全ての空気を支配しているかのようにだった。

ステンドグラスが割れるのではないか

というくらいの声量である。

「v'andare in Porta Rossa

(私はポルタ・ロッサに)

a c o m p e r a r l ' a n e l l o !

(指輪を買いに行きたいのです!)

S i , s i ,

(そうなの、そうなんです!)

c i v o g l i o a n d a r e !

どうしても買いに行きたいのです!)

「

何て自分に似合わない曲なんだろうか。

彼方はそう思った。

主任と講師が決めた課題曲だから勝手に変えるわけにはいかないのだが。

この曲は「ジャンニ・スキッキ」の劇中歌で

主人公スキッキの娘、ラウレッタが恋人との結婚を許して欲しいと

懇願する場面で歌われる。

自分にこのような機会は一生訪れないんだと彼方はしみじみと思った。

父がいない、ということもあるが、自分はいわゆる女の幸せを手にすることはできないと薄々感じていたのだ。

なぜなら…

「カーナちゃんっ」

振り返らなくても誰だかわかる。

「ああ、美笛…。」

「本当に凄い声量ね。公民館の辺りまで聞こえてたわよ。みんな振り返ってたっ。」

美笛はにこにこしていた。

彼女は最近やけに陽気だ。

しかし、彼方の心は曇っていた。

「ねえ、この曲僕らしくないと思わない？」

美笛は目を丸くし、あごに手を当てた。

「……そう言われてみれば…そうね。どっちかというところと女性らしくて、いかにもお嬢様って人が歌うイメージがあるわ。でもカナちゃんは何歌っても上手いじゃない。」

しかしながら、器用に上手いだけでは、聴衆に感動を与えることはできない。

「せめて自由曲は自分にあった曲にしたいんだ。」

彼方は聖アグネスの壁画に手を当てた。

あどけないようでどこか威厳のある彼女の眼差しはどこか美笛に似ている。

しかし、本当に彼女はこんな雰囲気だったのだろうか？

自分を表現するだけでなく

同時に美笛への想いを込められる曲を、と

彼方は考えていた。

続く。

「もう今年も終わりなんて信じらんないわ。ついこないだカナちゃんとお会ったばかりのような気がするの。」

…彼方と美笛は都会の喧噪から離れ、

町外れの丘に寄り添っていた。

二人の視線の先では

バン、バン…と大きな音をたてながら

色とりどりの花火が舞い散っていた。

今年もあと数分。

この街では大みそかの23時から元旦の1時にかけて花火を上げる。

ここからは花火をよく拝められるため

毎年この時間になると人が集まってくる。

しかし、今年はわりと人が少ない。

例年より寒いからだろうか。

やはりこんなところで寒い思いをするより、茶の間で紅白でも見ていた方がいいのだろう。

子供は風の子、というべきか。

和也は雪の上で賢一とじゃれあっている。

彼方はずっと花火の上がる方向を見ていたが

ふと、隣にいる美笛に目をやった。

彼女はいつになく生き生きとしている。

最近の彼女はどうも変だ。

彼女は毎年、教会で新年を迎えていたのに。

「∴美笛、教会にいかなくていいの？」

彼方が尋ねると美笛はにこにこしながらこう言った。

「今年はカナちゃんと一緒にいたい。∴それに神様は教会にしか
いらっしやらないわけじゃないわ。神様はどこにでもおられるのよ。」

美笛は空を仰ぐと十字を切って祈った。

彼方は何か引っ掛かったが、それ以上聞き出そうとはしなかった。

「カナちゃん、自由曲は決まったの？」

「…それがまだ見つからないんだ…。」

彼方は花火の方を向いたまま答えた。

「そう…。」

美笛も花火に目を向けた。

「…。」

彼方がシンガーソングライターになることを志し始めたのはこのときからだ。

…そりゃあ歌うのは自分なのだから、

誰が作った歌だろうと、その歌詞を自分のものにしなければなら
ない。

聴く者に伝えなくてはならない。

しかし、そうは言っても与えられる曲全てに気持ちが入れる訳では
ない。

そうなると歌詞中の主人公に「なりきる」のではなくて、あくまで
「演じる」だけになる。

それも声楽家の役目なのだ。

彼方は考えた。

シンガーソングライターになって、歌詞もメロディーも自分で作る
ことができたなら…。

思いの全てを自分のメロディーにのせられることができたなら…。

我ながら思いがけないことだった。

音楽家の父とピアニストの母を持ち、

父から厳格な音楽教育を受けてきた彼方。

ロック、ポップスは趣味でやっていたことで

本格的な道は全く考えていなかった。

「…もうすぐ年が明けるわよ。」

腕時計を見ながら美笛が言った。

美笛は彼方をうっとり眺めた。

彼方の鳶色の髪が

花火の光を浴び

金色に輝いていたから。

「10! 9! 8! 7! 6! …」

後ろから大学生たちの威勢のいい声が聞こえる。

「5! 4! 3! …」

美笛は自分よりも10cmほど背の高い彼方の肩に寄り添っていた。

まるで何かに引き付けられるように。

彼方は考え事に夢中なのか、特に反応はなかった。

「2! 1……!」

美笛の腕時計から新しい年を告げるベルになる。

「あけましておめでとー!」

後方にいる大学生たちが歓喜の声をあげる。

「おい、俺年が変わった瞬間、宙に浮いたぜっ!」

「くだらねー!」

和也たちもはしゃいでいた。

美笛は彼方以外、何も目に入ってなかった。

（天の父なる神様、また彼女と共に新しい年を迎えられたことに感謝いたします。）

美笛は少しかかを上げると

彼方の耳元に唇を寄せた。

（神様、今だけは心の中を彼女で満たすことを許して下さい…。）

「カナちゃん、愛してるわ…。」

意図したものではなく、無意識に出た言葉。

美笛のささやきと

花火の拡散は同時だった。

一番大とりの花火だった。

百合や牡丹のような花火が

次々と咲き

金や銀の火花を上げて散らしていく。

「ん……………？何か言った？」

彼方は目線だけ美笛に向けるた。

美笛は一瞬だけ目を見開くと

ほっと顔をゆるめ、微笑んだ。

「何でもないわ。」

彼方はやや眉間にしわを寄せたが

そのまま目線を花火に戻した。

美笛はふっと息を吐くと

再び彼方の肩に寄り添った。

今度は彼方も反応した。

「……っ！」

しかし、ここでいかにも照れたような態度を見せたら変に思われるだろうと

平常心を装うことにした。

「美笛、今年もよろしくな。」

美笛は一瞬悲しげな表情を浮かべた。

「ええよろしくね……。」

新年を迎えた歓喜の中、

二人は自分たちだけの世界に佇んでいた。

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418x/>

杏の思い出

2011年10月31日14時24分発行